

Ethnologueから見る言語危機の拡大

宮本 大輔 (COE研究員・RA)

今年、Ethnologue: Language of the worldが更新された。本文では、Ethnologue 14th(2000)と同15th(2005)のデータ比較から、言語危機の拡大状況を概観する。Ethnologueのデータは、各言語の現時点での正確な言語使用人口の数値を反映したものではないが、言語区分が非常に細かく、言語危機の状況を概観する上では有効な資料である。Table1はEthnologue 14th・15thに記載がある1,000人未満の危機言語をその使用人口によって分類・比較したものである。なお、言語危機度は便宜上A、B、C、Dと分類した。

世界の言語総数は6,809→6,912となっている。この増加は、新言語発見によるものだと考えられる。しかし、その一方で、消滅していく言語も存在する。Table1を見ればわかるように、2つのデータを比較すると、危機度Cに属する言語が302→344、危機度Bに属する言語の数が130→151、と急激に増加している。危機度Aに分類される言語数の数はオーストラリアが最も多い。オーストラリアでは、18世紀後半からイギリスによって植民地化が進められた結果、大陸東南部のマイノリティ言語はそのほとんどが消滅してしまった。

危機度Aの言語を比較したところ、15thではいくつかの言語が新たに消滅 (extinct) していた。具体的には、Cholón(Peru)、Abnaki, Eastern (USA)、Miwok, coast (USA)、Pome, North-eastern (USA)、Wappo(USA)、Narungga (Australia)、Nugunu(Australia) 等である。

危機度Aの言語には、台湾の原住民族語である亀崙 (Kulon-Pezeh) 語も含まれている。この言語はEthnologue 14thでは、すでに消滅したとされていたが、Paul Jen-Kuei Li (2000) の報告によって、86歳の話者が存在することが確認された。だが、この言語は「ほぼ消滅 (Nearly extinct) に分類され、依然として消滅の危機に瀕していることには変わりはない。

私が研究対象としている中国の言語総数 (方言及び共通語、民族語、部族語等を含む) は、201→235となっている。その内、言語使用人口 (バイリンガルを含む) が1,000人未満の言語は17→24と増加している。危機度Aに分類される言語はないが、危機度Dに分類されるものは比較的多く、代表的な例としては、満語、シベ語、ホジェン語などがあげられる。これらのマイノリティ言語を保護する言語政策も施行されているが、それと同時に、中国では共通語政策が強力に推し進められており、一部では次のような矛盾をきたしている。現在、施行されているマイノリティ言語保護政策は、政府公認の55の民族語のみを対象としたものであり、政府非公認の地域語・部族語の保護については何も言及していない。そのため、政府非公認のマイノリティ言語は、全国的な威信言語である共通語と地域的な威信言語の二つによって押しつぶされる形となり、消滅の危機に瀕している。

言語使用人口の減少は、その言語を用いる場面の減少、母語話者の言語的退化にもつながり、最終的には言語の消滅を招く。また、言語はただのコミュニケーションの道具ではない。人間の脳の高次機能を司ると同時に文化の運び手という役割を果たしている。この言語の消滅は、人類の文化的多様性の危機を招く危険性をはらんでいる。

Table1

